

## [総合的な学習の時間]

# PBLが組み込まれた総合学習で促される思考と変容

— 小学校高学年の作文シートにおける記述に着眼して —

水谷 徹平\*

### 1 問題の所在と研究目的

21世紀の社会は知識基盤社会であり、情報化やグローバル化といった社会的変化は予測ができないほど加速度的となっている。とりわけ、“人工知能の急速な進化が、人間の職業を奪う”“学校で教えていることは時代が変化したら通用しなくなる”といった未来予測も多く発表されている。平成28年8月に示された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、「これから子供たちが活躍する未来で一人一人に求められるのは、解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解いたり、定められた手続を効率的にこなしたりすることにとどまらず、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことであると考えられる。」と述べている。

学習指導要領では、総合的な学習の時間（以下、総合学習）は「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」ことを目標とする。総合学習は、まさに今、必要とされる学習活動である。課題を見つけ、問題解決する過程について、谷川（1993）は「子どもが直面している問題を解決することを通じて、子どもたち自身が自らの経験や知識を再構成して発展させようとする学習」として問題解決学習を挙げ、加藤（1997）は「総合学習が学習者の興味や関心、生活や経験といったことに基礎をおくならば、なおさらのこと『個人プロジェクト』、あるいは『小集団プロジェクト』といったものが考えられて当然でしょう」と述べるように、プロジェクトごとに問題解決していく活動を考える必要がある。溝上（2016）によれば、PBLとは問題解決学習や問題基盤学習、課題解決学習やプロジェクト学習と呼ばれ「①実世界の問題解決に取り組む、②問題解決能力を育てる、③解答は一つとは限らない、④自己主導型学習を行う、⑤協働学習を行う、⑥構成的アプローチを採る」ことを特徴とする。総合学習では、作文をポートフォリオ化し、蓄積することで子どもの思考や変容を読み取ることが重要な方法であるが、学術情報検索サービスCiNiiで、「総合的な学習」、「作文」、「小学」を検索した所、ヒットは5件のみであった。小学校の総合学習で、子どもの思考や変容が促されるのかを、具体的な知見として蓄積していく必要がある。

そこで、本研究では、①東日本大震災被災地の方とかわる、②子どもがプロジェクトを立ち上げ、遂行することで問題解決を行いながら資質・能力を育む、③子どもの発案で様々なプロジェクトが立ち上がり、試行錯誤しながら解決へと向かったように活動としての答えはない、④教師主導ではなく子ども発の学びとなっている、⑤可変的なチームで、状況によってチームや内容は変わりながらも協働して取り組む、⑥活動しながら子ども自身が活動の意味付けをする構成的な活動である、PBLが組み込まれた総合学習に焦点を当て、活動における子どもの思考や変容を明らかにする。

### 2 研究の対象と方法

- ・対象期間：平成28年4月～平成28年12月
- ・観察対象：新潟県公立小学校第6学年1組児童28名
- ・対象活動：総合学習「ともに生きる」（年間70時間）
- ・調査方法：児童が記述する作文シートの分析

\*長岡市立脇野町小学校

本研究では、総合学習においてPBLが組み込まれた活動を筆者が年間を通して参与観察し、どのような思考や成長が促されるかを分析・考察した。研究対象校では、東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市立H小学校と交流活動を行って6年目である。研究観察対象の児童は、平成27年度の6年生から、被災地支援の活動を続けて欲しいと伝えられた。学年での話し合いを経て、「被災地の人に笑顔になって欲しい」、「少しでも復興の手伝いをしたい」、「被災地のことを長岡の人に伝えたい」などの思いから、活動で自分がしたいこと、できることを考え、プロジェクトごとに活動が始まった。やりたい内容ごとに、花火・お手伝い・交流・義援金・プレゼント・お話を聞く・竹あかりの7つのプロジェクトチームが立ち上がった。訪問に向け、花火打ち揚げのための募金活動や、義援金を集めるチャリティーグッズ作成・販売を行い、多くの方から励ましや支援を受けた。

10月の訪問では、花火打ち揚げや交流会など子どもが準備や企画してきた活動を現地で行い、被災地の人々と直接かわり、感謝の言葉を聞いたり笑顔を見たりしたことで、達成感や自己有用感を得た。また、現地の様子を実際に見聞きしたことで「復興するにはまだ支援が必要」、「被災地の様子をもっと多くの人に伝えたい」などの新たな課題意識をもった。帰校後は、協力してくれた人々への活動報告を行い、被災地の現状や感じたこと、活動協力への感謝の気持ち等を伝える活動に取り組んだ。訪問以降、一人一人が訪問活動で感じた思いから活動を広げ、訪問活動を通して感じたことを多くの人に伝える『伝える活動』、今後も被災地への支援を続ける『支援活動』、被災地や支援活動の今後を考える『未来に向けての活動』を展開した(図1)。

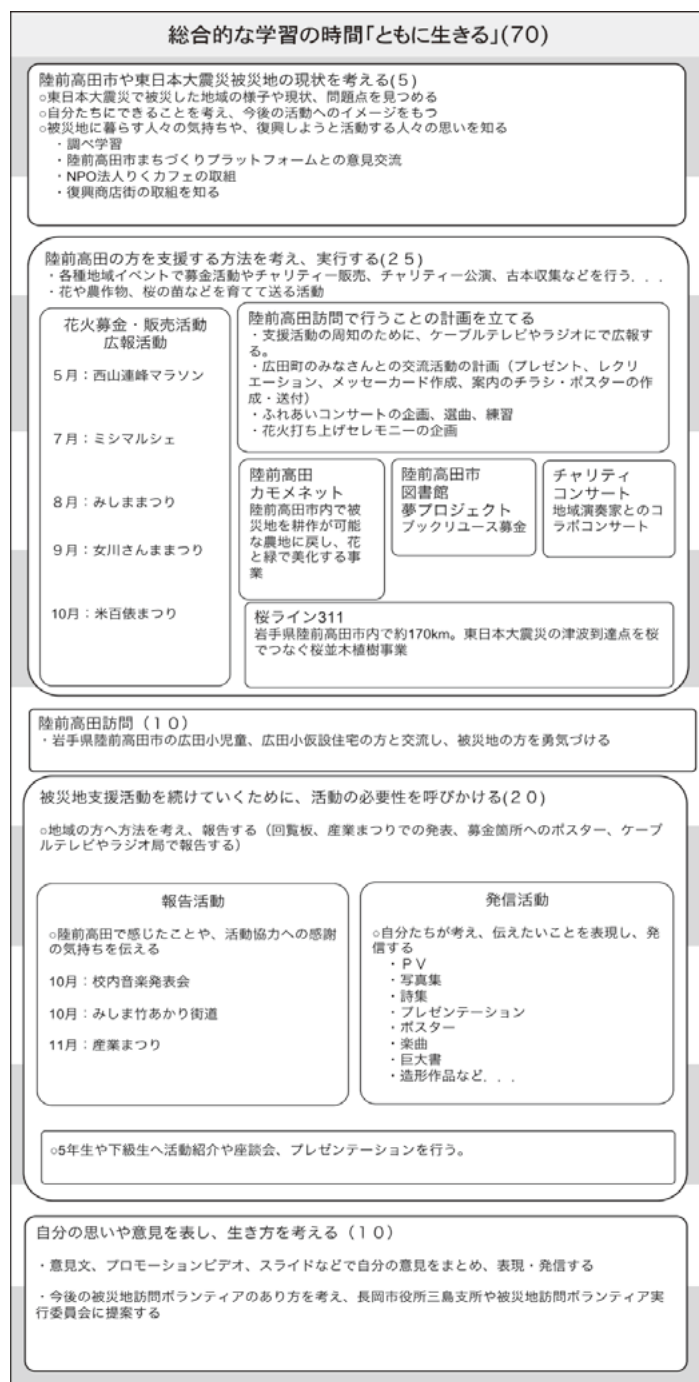


表1 作文シートの記述日と共通テーマ

	記述日	作文シート記述の共通テーマ
活動前	12月2日	6年生からのメッセージ
	2月5日	6年生との座談会
	4月7日	陸前高田訪問に向けて
	4月8日	陸前高田訪問でやりたい事
	4月11日	陸前高田訪問の人々のために
	4月15日	お金の集め方について
	4月26日	熊本支援募金を通して
	4月27日	市民大賞授賞式に参加して
	4月28日	これからの活動に向けて
	5月10日	なぜ、今、陸前高田なのか?
訪問前	5月24日	西山マラソンでの活動をふり返って
	6月16日	最近の振り返り
	7月12日	穂苅さんと出会って
	7月13日	みしまルシェ
	8月16日	三島祭り1日目
	8月16日	三島祭り2日目
	8月29日	陸前高田のビデオを見て思った事
	9月7日	陸前高田訪問準備
	9月12日	決意
	9月20日	活動の歩み
訪問後	10月6日	訪問活動1日目
	10月7日	訪問活動2日目
	10月10日	無題
	10月12日	自分の成長と今後の活動
	10月26日	報告会で「伝えたいこと」と「感じてほしいこと」
	11月7日	アオーレの報告で伝えてほしい事
	11月11日	伝える活動(長岡市内)
12月15日	自分の成長を振り返る	

図1 総合学習年間活動計画

本研究では、活動の際に子どもが書いてきた作文シート（表1）のテキストマイニング分析をおこなう。テキストマイニングとは、文章を単語や文節で区切り、それらの出現の頻度や同じ文に同時に単語が存在する共起、出現傾向、時系列などを解析する分析方法である。

中心に分析する対象として、抽出児Mを選定した。M児は現地の方の思いを聞いてきたいという思いからスタートし、被災地訪問前はどのように交流を行っていくか、募金してくれた地元の方の思いを伝えたい、また被災地訪問後は現地の方の思いを伝えたいと、プロジェクト活動の内容が、状況に応じて可変することが予想されたため担任教諭と選定した。

作文シートの分析には、KH coderを用いた。地名などの固有名詞を強制抽出し、子どもの思考に関係のない記号などを取捨選択する前処理を行い、結びつきの強い抽出語をグループ化し、抽出語間の関係を視覚化した。また、Jaccard係数による特徴語の抽出と対応分析を行い、頻出する語の変容について考察した。

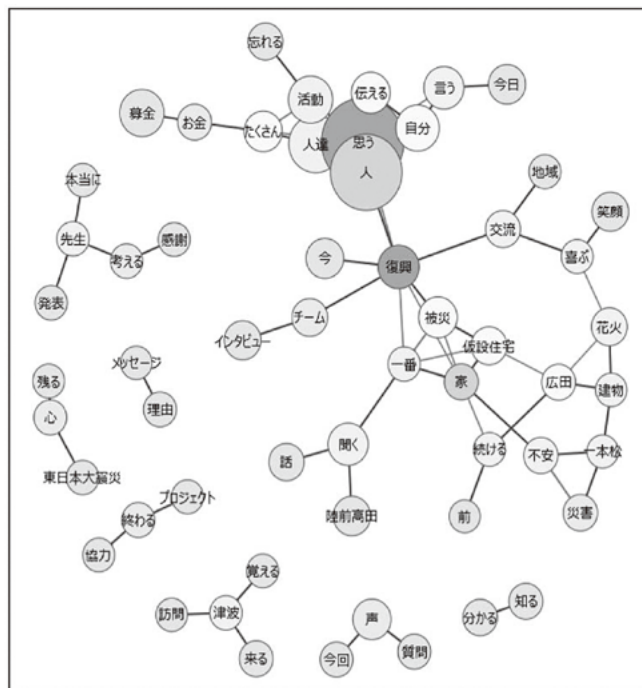


図2 M児作文シートの抽出語共起ネットワーク

### 3 M児の作文シートから見られる意識の変容

分析は平成27～28年の総合学習で記述した作文シート計28回を対象とした。6年生から活動を続けてほしいと依頼された第5学年時のM児の記述と、陸前高田市訪問を行う前後の記述を3期に分け、分析・考察する。

#### (1) M児の記述分析

分析対象は305の文、語の延べ数が7,411、異なり語数は956であった。図2は、抽出語の共起ネットワークである。抽出語の最小出現数を4に、描画数を60に設定した。強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画した。また、語がどの程度中心的な役割を果たしているかという媒介中心性が高いものほど、色を濃くなるように表示した。

媒介中心性が高いのは「思う」、「復興」の語であり、「人」がそれを結ぶネットワークとなっている。また、「思う」を媒介に「伝える」-「自分」-「言う」、「人」-「復興」-「一番」と連なって、「聞く」-「話」/「陸前高田」という語が出現している。さらに、「復興」-「チーム」-「インタビュー」、「東日本大震災」-「心」-「残る」といった共起が出現している。これらから、M児が被災地の人達からの話を聞くインタビューや気持ちを伝えたい志向が示されている。

次に、抽出語のカテゴリ化を可視化するために、自己組織化マップ（図3）を作成した。1辺のノードを20、学習回数を1000として、6クラスタに分類した。さらに、クラスタに分けられた語が出現している本文の内容を参照し、

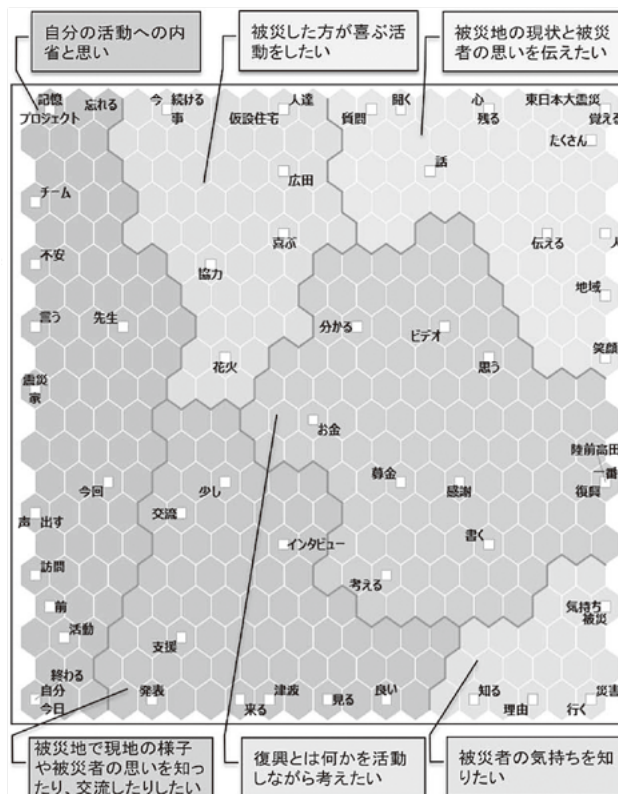


図3 M児作文シートの抽出語自己組織化マップ

クラスタには内容を端的に示す表札を付けた。ノード数が最も多かったのは、「復興」、「陸前高田」、「考える」といった語があり、「募金」活動や「ビデオ」作成をしながら、「復興とは何かを活動しながら考えたい」クラスタであった。



また、震災の事を多くの人が「記憶」し続け、「忘れる」ことがないように「活動」してきた「プロジェクト」についてクラスタ化された「自分の活動への内省と思い」が続き、「津波」の被害を「見る」、「交流」を行うとともに、「インタビュー」をすることが「支援」になるといった「被災地で現地の様子や被災者の思いを知ったり、交流したりしたい」というクラスタが出現している。また、「東日本大震災」を知り、「質問」して聞いた「話」を、「たくさん」の「地域」の「人」に「伝える」ことがクラスタ化された「被災地の現状と被災者の思いを伝えたい」と、「広田」地域の「仮設住宅」の「人達」が「喜ぶ」ような「花火」を上げる活動を「続ける」といった「被災した方が喜ぶ活動をしたい」というクラスタが出現している。そして、「被災」した方の「気持ち」を「知る」といった「被災者の気持ちを知りたい」という自己の思いがクラスタ化されているとみることができる。

(2) 活動前・訪問前・訪問後のM児の思考と変容

M児の活動前・訪問前・訪問後に出現した特徴語リストを抽出し、分析を行った(表2)。また、M児の活動前・訪問前・訪問後に出現した特徴語をJaccard係数によって抽出し、対応分析して布置した(図4)。差異が顕著な上位50語を使用し、出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。原点に近いものは、特徴的ではなく、原点から訪問前、活動前、訪問後の方向に離れているほど、その時期に特徴的な語であることを示している。

M児シートの活動前・訪問前・訪問後3期の特徴語を見ると、他者を表す名詞は「人達」、もしくは「人」が3期にわたって現れるのに対し、活動前と訪問前には自己にかかわる語は見られず、訪問後には「自分」(.115)、「チーム」(.048)という特徴語が現れている。M児の中で他者意識は底流しながらも、被災地訪問後は自己の行動や生き方について思考している傾向が見られる。志向や思考の内容にかかわるサ変名詞、動詞については、活動前は「思う」、「活動」、「行く」に比べて、訪問前は「思う」、「活動」、「募金」、「聞く」、「復興」、「話」と活動の具体化に伴って大幅に増えている。訪問後は「言う」、「伝える」、「見る」、「報告」、「発表」と、訪問によって得た被災地の方の思いや現状を自身の思いとして、他者へ表現・発信しようという傾向が見られる。

また、活動前には「災害」、「津波」、「震災遺構」、「仮設住宅」と、活動対象となる漠然とした語が特徴的であるのに対し、訪問前は「中学校」、「募金」、「ビデオ」、「インタビュー」といったプロジェクト活動の具体にかかわる内容が現れ、訪問後は「報告」、「発表」と自分が他者にできることや「助け合う」という、活動を総合し、自己の生き方の中で見出した価値が表れている。

そして、原点(0,0)周辺には、「人」、「思う」、「活動」、「花火」といった、3期にわたって抽出される語が見出ださ

表2 M児シートの活動前・訪問前・訪問後の特徴語

活動前	訪問前	訪問後
仮設住宅 .117	思う .261	人 .157
思う .115	人 .176	自分 .115
人達 .114	人達 .122	言う .078
災害 .109	募金 .108	伝える .063
活動 .105	活動 .075	今 .054
行く .088	京 .065	見る .049
震災遺構 .071	聞く .064	笑顔 .048
津波 .070	復興 .063	チーム .048
花火 .065	声 .061	報告 .043
今 .057	話 .061	発表 .042

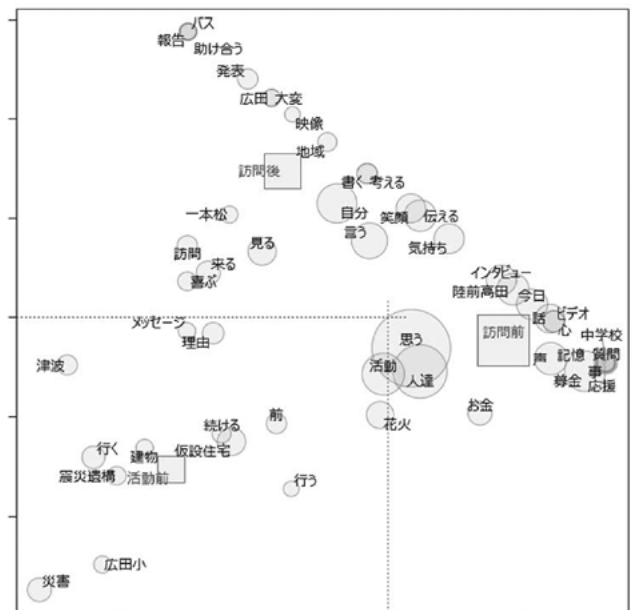


図4 M児作文シートにおける3期ごとの抽出語対応分析

**作文シート1「6年生からのメッセージ」 自分の題名「災害者の気持ち」**

私は、行った方がよい、この活動をつづけた方がよいのかどうか分かりません。行った方がよいと思う理由は、私は、災害の現場をしっかりと見た事もないし、中越地震の頃はまだ小さかったので、災害はどういうものなのかをよく知りません。なので現地に行って、災害をしっかりと学ぶ、という事と、W小は、この活動を何年前から受けついできています。私達の年でやめるというのも、大きな責任だと思います。もし今の4年生が6年になった時、その活動をやりたいと思っても、前の私達がやらなかったとすると、少しやりにくいと思いました。行かない理由は、災害から何年か経っているということです。それ以上に、東日本大震災の後にも、災害がおきた県もあります。私は、何でその県の人達には何もしないのかなと思ってます。豪雨は、もう治まっているのかもしれないけれど、少しそこがひっかかっています。でも、どっちかという、行った方がいいのかなという気はします。今でも、仮設住宅の人がいて、「本当の家」じゃない人がいる人はたくさんいるのは事実です。その人たちとコミュニケーションをとったり、安心させてあげたりするのは、とても大事なことだと思います。私は、仮設住宅の人達が、この活動をどう思っているのかが不安です。実際私達は、災害現場を「見」に行っているという内容もあるので、災害にあった人達は、何も苦しい思いをしない私達が、災害現場を見に行く、というのは、少数の方々にとっては、「しっかりと学んで、このことを忘れないでほしい」と、快く受け入れてくれる方もいると思います。でも中には、「被災者は“かわいそう”」というイメージを持っているのが、今の私です。別にもう苦勞もしていないし、何も必要ないと思っている被災者の人にとっては、「自分達は“かわいそう”」に思われていて、たくさんの人にいろんな支援をされている」と思っているのであれば、私は続けたい方がいいと思います。私たちが来るのを楽しみに待っている人達はきっといると思います。でも、例えばメッセージ集をわたしても、その人達がちゃんと自分の家でふつとくらする訳ではありません。メッセージを渡すより、その人達が必要としているものを渡すのが一番だと思っています。なので私は、この活動は、行くをやめて、お金を寄付して、復興がより早くなるようにしたいと思っています。

図5 M児の第1回目の作文

また、活動前には「災害」、「津波」、「震災遺構」、「仮設住宅」と、活動対象となる漠然とした語が特徴的であるのに対し、訪問前は「中学校」、「募金」、「ビデオ」、「インタビュー」といったプロジェクト活動の具体にかかわる内容が現れ、訪問後は「報告」、「発表」と自分が他者にできることや「助け合う」という、活動を総合し、自己の生き方の中で見出した価値が表れている。

れる。M児にとって自分の志向でもあり、被災地の方のためにもなるとも思考したインタビュー活動や、被災地と地元の人々の思いを双方に伝えるという活動を行う事で、「復興とは何か」という抽象的な問いを自分ごととして思考し、思考と経験を総合させて「助け合う事が大切」という生き方につながる価値をつくっていることが示唆される。

記述内容を見ると、陸前高田支援を依頼され、「何故、陸前高田なのか」・「支援効果の疑問」から成る「本当に陸前高田へ支援すべきか」と、「支援活動を継続する重要性」の双方を感じ、考えている。M児が抱いた「復興とは何かという問い」と、6年生から伝えられて知った「実際に復興していない事実」という、活動に多様な思考や志向を促すような状況が活動の前提段階に埋め込まれていることが分かる。そして、活動開始から訪問までを中心とした、「被災者を笑顔にしたい」・「想像した被災者の思い」・「被災者の気持ちと悩み」という思いから成る「被災者を喜ばせる為に活動したい」という方向性と、「災害を学びたい」・「被災者の思いを知りたい」・「被災者の思いを伝えたい」というM児個人の志向が相互にかかわりながら、「活動の振り返り」⇔「充実感・自己の成長」訪問前後にかけて、「交流会への決意」と「被災地と地域を橋渡し」から成る「これからの活動への志向」という、実際に活動を行い、振り返り、次にしたいことを思い描き…という連続的な思考と志向が見て取れる。そして、その動機として、活動する中で得た、「協力してくれた方への感謝」・「チームとしての成功」・「自己の行為に対する肯定的な反応」・「募金協力への感謝と申し訳なさ」からなる「活動に対する反応と協力への感謝」が関わっている。活動とそのフィードバックから、「問いの解消と志向」が得られ、これらの経験を通して、「自己の生き方につながる思考」へとつながっていると考えられる。図5, 6, 7はM児の作文の一部である。

### (3) 学級の子どもの記述分析

12月に記述した「自分の成長を振り返る」という6年1組28名分の作文を対象に、学級全体の内容を分析した(図8)。428の文、総抽出語数10,261、異なり語数964が確認された。抽出語の最小出現数を4に、描画数を100に設定して共起を見た。抽出語群で大きなものは、花火チーム・交流チームが中心となりながら、全員で取り組む事が多かった「陸前高田-成長-訪問-募金」-「花火」-「笑顔」と言った、実際に訪問及び訪問に向けたグループであり、他者にとって価値ある活動についての共起が見られる。また、「花」-「種」-「プレゼント」のプレゼントチーム、「竹灯り」-「みしマルシェ」といった竹あかりチーム、「草取り」-「不安」・「グループ」-「お手伝い」のお手伝いチーム、「義援金」-「地域」-「稼ぐ」の義援金チームなど、M児だけでなく、多くの子どもが自己決定し、活動してきたプロジェクトチームごとに、多様な経験と価値が生まれていると考えられる。

#### 作文シート24「訪問活動2日目」 自分の題名「自分の思い」

今日は、まず復興研修をしました。加藤さんの自分の家や町が壊れていくのを見なくてよかったという言葉が心に残っています。ページいっぱいメモしました。震災遺構の見学では、トイレ休憩で見つけた、駅のホームを見てびっくりしました。ホームから見える景色は殺風景で、少し寂しい感じでした。実は私は奇跡の一本松のバスでうとうととしていて、いつの間にかぼほ通り過ぎていて、ギリギリで一本松が見えました。それがすごく心残りです。でも見たときに、一本松の周りにはほとんど建物もなく、そこに一本だけ立っていて本当に奇跡だなと思いました。H小の交流会では、お話しチームでいくつかトラブルがあって、コード忘れた時はすごく焦ったし、発表できないんじゃないかと言う不安も出てきました。でもH小の先生方のおかげでコードを借りることができてよかったです。発表中も映像が再生できなかったりして、また不安になったけど交流チームのHさんや、水谷先生のおかげで無事発表ができました。私たちが伝えたことがちゃんとH小の人に伝わってほしいです。地域の交流会は会場にいる人全員にインタビューしました。アンケートは書いてくれた人が少なかったけど、書いてくれた人がいて作って良かったと思いました。最後の花火は嘉瀬さんにもすごくお礼が言いたくなりました。ものすごく綺麗でこの活動して良かったと心から思いました。地元の人たちも喜んでくれて、竹灯りも、持ち帰る方もいました。H小の人も地域の人も、みんな笑顔になってくれてとてもうれしかったです。自分にも人を笑顔にすることができるんだなと思いました。何よりも今までの半年間、この活動を続けて良かったと思いました。

図6 M児の訪問活動の作文

#### 作文シート30 「自分の成長を振り返る」 自分の題名「助け合い」

私は、4月から12月の間で、人と協力することを覚えました。今までの私は、自分のチーム、プロジェクトがちゃんとできていけばそれでいい、と言う感覚でした。でも、総合を始めて、全員がちゃんとできていないとだめと言うことが分かりました。私が今年の初め頃に書いた作文に、「いろんな人の思う復興がどんなものか知りたい」と書いてありました。今まで聞いた人達の答えは様々で、全部正しかったです。自分の中での復興は、「震災が起きた時のことを笑い話にできるようになった頃」だと思います。というのは、次にいつ地震が来ても、みんなで助け合う準備はできているぞという自信がつくと言う意味です。総合の準備中に、自分のやらなければいけないことができていけば、ぼーっとしていたりしていたけれど、みんなで助け合えないといけない、みんなで助け合えないと津波にのみ込まれます。だから、助け合うってすごく大切なことなんだなと思いました。私は、自分のやる事が終わったら、他の人の手助けをするようになりました。そして、自分がまだ終わっていないとき、誰かが助けてくれるようになりました。今、やっていることは、陸前高田の人達へのビデオメッセージの作成です。お話しチームの時は、人数は少なく、全員に仕事もまわって、話し合いもどんどん進んでいきました。でも、今のチームは人が増え、中心で動いている人が話をやっている状況が分からず、話し合いもなかなか進みません。前のチームよりかなり大変になりました。何の話をしているのかが分からなくなる人もいたりして、ちゃんと進むのかどうか不安になっていました。でも、その人達に、ちゃんと話せば案を出してくれました。中心の人達だけで話し合っていたのがよくなかったのかなと思いました。やっぱり助け合いは大切です。

図7 M児の活動終盤(12月)の作文

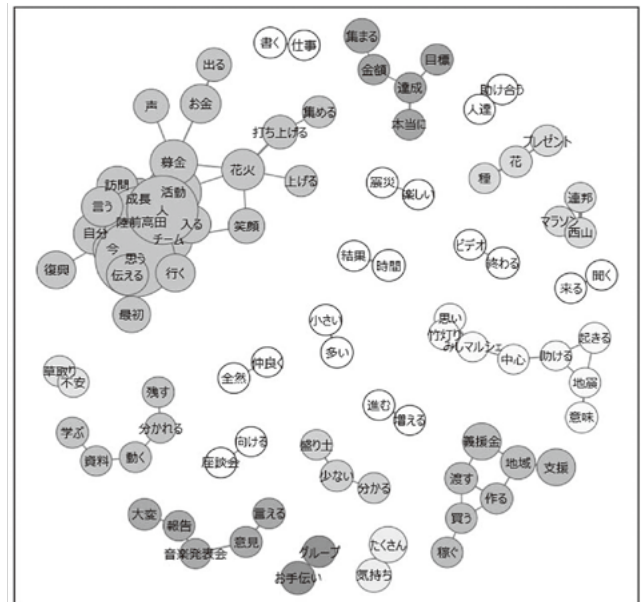


図8 学級全体の抽出語共起ネットワーク

## 4 本研究の結果と今後の課題

### (1) 本研究の結果

M児は本活動で、自己の問いに向き合いながら他者が笑顔になるような志向と試行による活動を重ね、「災害を学びたい」、「被災者の思いを知りたい」、「被災者の思いを伝えたい」という志向を追い、「問いの解消と志向」や「自己の生き方につながる思考」へとつながっているとと言える。活動しながら思考し、肯定的な反応を得ることを重ね、さらに自らの志向をつくり、つくりかえて他者や社会的価値の高い目的のために自己実現しながら見方・考え方や生き方を更新していく様が見て取れた。葛藤の末に自分たちで決めた活動、自分が選んで行っている活動という、自律性の欲求が充足する状況が埋め込まれていることが考えられる。研究対象の実践は、自分が何を問いとしてもち、何をしたいか自己決定する機会が保証されているとともに、「本当に陸前高田へ支援すべきか」と、「支援活動を継続する重要性」に代表される様々な価値が活動に埋め込まれている。また、自分達の活動について試行錯誤を重ねられ、校内→地域→市内→陸前高田市と、徐々に物理的・心理的距離や範囲が広くなりながら、「被災者」や「協力者」といった、学校外部の自分からは本来、距離感がある社会や他者と直接関わって、肯定的な反応を受ける状況が埋め込まれている。

また、未経験の活動に対する葛藤や自己の生き方にかかわる内省の際、経験した他者から話を聞き、自己の生き方と照らし合わせて意味をつくり出している様が見て取れた。活動が上手くいっていないとき、M児にとって自己の内面に帰属すると捉えた募金活動の声出しやインタビュー活動については反省的思考が見られ、次回以降の活動に改善を志向するのに対し、訪問活動時の動画再生など、活動のイメージや段取りが具体的に思い描けなかった事に帰属する物理的な失敗については、他者からの肯定的な反応があったことを意味付けし、失敗経験として捉えていないと考えられる。

以上から、子どもが自己の内面に帰属すると思われる適度な難易度の葛藤経験と、改善する試行錯誤の機会が保証されることで、活動が動機づけられることが示唆された。

平成28年12月、6年生担任であるK教諭に、半構成インタビューを行った。教員経験19年、陸前高田訪問を3回経験している。M児は「力がある子ではあったが、もめるくらいだったら黙っている子」だったのが、「人とかかわったり、思っている事もちゃんと言ったりするようになった」と評価している。「被災地の方を笑顔にする」という

社会的文化的な価値と、「復興とは何かを知りたい」という自己実現に向かう志向の擦り合わせが行われ、自分の生き方を変容させていた。この様相は、木村(2003)の言う「小学校高学年の児童にとっては、自分の追求している課題が、誰のために役に立つのか、また自分にとってどういう意味があるのか(何のために追求しているのか)を考えること、つまり自分自身の『生き方』について考えることにつながる学びが最も大事である」ことにつながる。

### (2) 今後の課題

PBLのような一斉型ではない活動を行う上では、子どもの見取りや評価のために、作文シートやポートフォリオを用いていくことになるが、作文シートによる記録、テキストマイニングによる語の分析だけで、本当の子どもの思考や変容に迫ることは難しい。活動やつぶやきなど、総合的に見取りながら、さらに質的な分析をする必要がある。また、本研究では、主としてM児についてしか言及できなかった。他の子どもにとっても、どのような活動がどのような資質・能力を育むのかを明らかにしていく必要がある。

## 引用・参考文献

- 加藤幸次、『総合学習の思想と技術』, 明治図書出版, 1997, p.108  
 木村吉彦、『生活科の新生を求めて－幼小連携から総合的な学習まで』, 日本文教出版, 2003, p.232  
 ジョン・デューイ、『学校と社会』, 岩波書店, 1957, p.159  
 谷川彰英、『問題解決学習の理論と方法』, 明治図書, 1993, p.26  
 溝上慎一／成田秀夫、『アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習』, 東信堂, 2016, p.5  
 文部科学省、『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告)』, 文部科学省ウェブページ, 2016  
 文部科学省、『教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)』, 文部科学省ウェブページ, 2015  
 文部科学省、『小学校学習指導要領』, 文部科学省ウェブページ, 2015

Q:M児の成長についてどのように捉えますか。

この活動を通して、何となく、カメラやコンピュータを使う人という位置づけになり、児童会祭りで映画を撮った時も大活躍した。最後の学習参観で一番がんばった事をみせようというときに、似顔絵をして、多分本人も自分のよさを再確認し、自信をもって活動するようになった。元々力がある子ではあったが、もめるくらいだったら黙っていると自分でも言っていた。卒業文集では、「あのね、じつはさ…と今まで言わない自分がいたが、総合でも言わないと活動が悪い方に行っていた。勇気を出して言うようにしたらわかってくれたり、協力してくれる人がいたりして、自分が変わった」と書いていた。陸前高田に伝えるチームが大事帯になって、うまいかないときも、伝える事を怠っていたと感じるようになった。人とかかわったり、思っている事もちゃんと言ったりするようになった。あの子の弱かった部分が一番伸びた。

図9 担任教諭へのM児の成長に関する聞き取り